

“Be international” の実践



京都府立医科大学眼科学教室あげての目標の一つに、“Be international”があります。我々が行っています臨床・研究の情報を世界に発信し、また世界中からもさまざまな物的・人的交流を受け入れ、眼科の発展に貢献しようとする目標です。木下教授が就任以来、これまで教室および教室員と交流のあった海外の臨床・研究施設は多岐にわたっております。短期および長期留学した教室員も多く、今後も国際レベルで高く評価される教室を目指し、教室員一同が一丸となつてのぞむ所存です。

(中村隆宏)

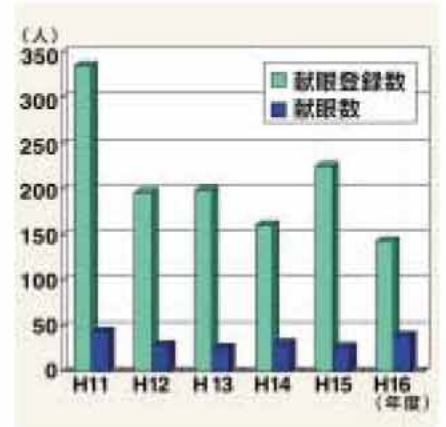
京都府立医科大学附属病院眼球銀行の現状

京都府立医科大学附属病院眼球銀行は、昭和33年に全国6番目のアイバンクとして設立され、今日まで47年間にわたり、国内での角膜移植のパイオニアとして、眼球提供登録の普及やアイバンク活動の啓発、さらには安全かつ適切な角膜移植の推進に取り組んできました。設立以来眼球提供のご登録をいただいた方は19,000名以上に達し、すでに780名におよぶ故人から崇高なご遺志に基づき、眼球を提供していただきました。その結果、同病院を主に1,400例に上る角膜移植が行われ、多くの患者様が視力を回復され社会復帰を果たしておられます。全国的なドナー不足は当アイバンクでも例外で

はなく、年々献眼登録数および献眼数ともに減少してきておりこれからの大きな問題点でもあります。平成16年度は献眼登録数は143人、献眼数は54眼でした。本年度もほぼ同様の傾向で推移しており、特に臓器移植ネットワークを介したご提供が増加してきており、ある意味で今後の臓器移植提供のありかたを暗示しているようです。

アイバンク運営においては角膜スタッフを中心に多くの教室員や関係者の御協力によりなっておりますが今後とも暖かいご協力をよろしくお願いいたします。

(稲富 勉)



ロービジョン外来の現状



写真は、拡大読書器を用いてミートソースの賞味期限をチェックしているところ

ロービジョンケアは、保有している視機能を最大限に活用し、生活の質(QOL)の向上を目指すものです。当科ではロービジョンケアが始まって6年が経過し、現在まで延べ673人の患者様が来院され、情報が広まるとともにニーズが高くなってきています。

一般に視力が0.3ぐらいに低下すると新聞が読みにくくなったり、字が書きにくくなるなど日常生活に不自由が出てきます。当科では0.3前後の軽度の視力低下の患者様にはハイパワーレンズ(拡大効果を用いた強めの近用眼鏡)や低倍率のルーペなど光学的補助具の選定を行い、読み書きの不自由さに対してサポートしています。また更に視力が低下して

いる患者様には拡大読書器(写真参照、台の上に見たいものをのせるとテレビに拡大して映る機械)や高倍率ルーペなどの紹介に加えて、手帳などの制度について情報提供し、必要のある場合には患者の会やリハビリテーション施設、教育機関の紹介も行っています。また最近では音声パソコンの目覚しい発達により、かなり低視力の方でもメールやインターネットなどコミュニケーションツールの利用が可能となっています。「患者さんに必要な情報を必要な時期に知っていただくこと」をモットーに医師、視能訓練士が担当し、ボランティアの協力も得ています。

(視能訓練士 山村麻里子)

編集後記

新しいフォーマットでお送りする第2号、通算では第6号になります。本小冊子は、眼科関係の方々にはもちろんですが、眼科以外の先生方へアップデートな医療情報をお届けすることも大きな目的にしております。眼科医療の現状に少しでもご興味を持っていただければ幸甚に存じます。(木下 茂)